

辺野古——非暴力直接徹底抵抗の勝利

平良 修

つて自分の船を提供している辺野古の漁民たちもまた、

2004年4月19日、那覇防衛施設局は車両20台100人の勢力で沖繩・名護市辺野古の漁港を襲った。午前5時のことである。辺野古沖合いに普天間代替米軍飛行場を建設するための作業ヤードを設けることが目的だった。阻止団は50名で迎え撃った。国家権力の暴力的な行動に阻止団は激しい体当たりをもって応えた。彼らはヤードの一部を囲っただけで退散した。

その後、座り込みテントの中には一つの猛省があった。暴力装置である軍事基地の建設を阻止するために暴力的に対応すれば、彼らの暴力思想・手法と同じ立場に自らをおとしめることになるのではないかと。その日以来テントには伊江島土地闘争の非暴力抵抗のリーダーであった阿波根昌鴻さんの大きな顔写真が掲げられている。「辺野古の阻止行動は非暴力直接徹底抵抗による。この方針に賛同できない人は参加を遠慮して欲しい。」この鉄則は厳守されて今日にいたっている。沖繩全体が日本政府の構造的差別政策の中にあり、政府からチャーター料をもら

日本政府による犠牲者の一人であると言える。本当に対決すべき相手は漁民ではなく、日本政府である。漁民たちとは対話の可能性を残しておこう。私たちの非暴力直接抵抗の行動はまずそこで示された。工事を執行するボーリング会社の作業員たち、それを現場監督指揮する那覇防衛施設局職員たち、彼らに対しても、私たちは基本的に同じスタンスを堅持した。

海上では危険防止のため、大きく強い船は小さな弱い船を保護しなければならぬルールがある。私たちは手漕ぎの舟を使った。相手は動力船。まわり着く非力のカヌーを、彼らは蹴散らすわけにはいかない。弱さを武器にした抵抗の前には彼らはたじろいだ。それでも突入する動力船に対しては、阻止団は海中に飛び込み、生身でそれをささぎった。それは絶えず怪我と死の危険を伴った。幾人かが負傷させられて救急車で搬送させられたし、危機一髪死を免れた仲間もいる。施設局はそれでもボーリング用の鉄パイプ槽を4箇所、リーフ内に建てた。阻止団の新たな戦術は、作業船が出航する

前に槽を占拠することだった。そのため連日夜明け前から夕刻までの海上の座り込み。海上の冬は厳しい。風雨が全身を冷やす。真夏の太陽は容赦なく焼きつける。作業船が激しく迫ってくると、彼らは槽の外側に身を置き、作業中止を要求した。一年近く海上に建てられたままの槽は腐食がすすみ、崩壊の恐れが見えた。危険だから立ち去るようと呼びかけられると、壊れることは望むところ、頭を打たないように海に飛び込む用意は出来ていると応え返す。しかし24時間体制が50日続いた時はさすがに体力気力の限界が見え始めた。

「あなたたちに人殺しの手伝いをさせたくないのです」作業員たちへの真心を尽くした呼びかけ、加えて一步も譲らないしぶとさ。海底に投げ込まれた建設機材に潜ってしがみつく抵抗。それが連日の一年間。作業員たちの人間性は揺さぶられた。もはや暴力的な強行突破は彼らには出来なかつた。予定されていた63箇所のボーリングは、一箇所も出来ないまま、大型台風14号の直撃予報が追い風となり、一年近く海中に建っていた鉄パイプの足場は完全に撤去され、彼らは撤退することとなった。

辺野古の阻止行動は、醒めた個人の群れが主力であった。辺野古は平和学習の
(19ページ下段につづく)

◎できることは何でもやっつけていこう◎

それから一カ月余り、じっくり考えて行動を起こすというより、行動しながら考えたというのが正直なところだ。毎晩、遅くまで「どうしよう、こうしよう」と話しながら、すべてが手探りで綱渡りのような状況であった。ただただ悔いの残らないように、できることは何でもやっつけていこうと思った。

幸い私たちの呼びかけに応え、毎日のように近県の方がたが応援に駆け付けて下さり、全国各地からカンパや応援メッセージが届き、私たち岩国市民はどれほど勇気づけられ、励まされたことかしかない。

雨の日も雪の日も、ひたすら投票を呼びかけるビラを配り続けた。八四歳のおばあちゃんは、子や孫のことを思うとじっとしておれないと毎日毎日ビラを配り続けて下さった。プラカードを首に下げ、駅前立ちビラ配りを続けた。何としても五〇%以上の投票率と圧倒的多数の反対意見で、私たち市民をまったく無視した無謀な移駐計画案を白紙撤回させたいとの一心であった。

住民投票に反対し、棄権を呼びかける運動や、基地拡張の見返り振興策を求める声も根強くある。けれどこれまで岩国は基地で潤ってきたであろうか。基地で

街は決して豊かにはならない。むしろ更なる騒音被害、米兵の犯罪によって、ますます住みにくい街になってしまふ。

三月五日には「3・21GO!」一五〇〇人の人文字、投票日前日には四〇〇人の市民大集会と、少しずつ手応えも感じてきた。「安心や命と引き換えの振興策なら御免だ!」「騒音や犯罪に苦しめられずに安心して暮らせる街を子や孫に!」という心からなる訴え、叫びが通じた。住民投票はみごと大成功。はつきりと「ノー」の意思が示された。

さあ、この民意を国に届けよう。国の政治家はアメリカの顔色ではなく、私たち国民の、市民の声に耳を傾けて政治を行なうべきだ。ラムズフェルド米国防長官は「歓迎されないとここに基地は置かない」と明言した。私たち市民は、もちろん基地を歓迎しない。

◎これからが正念場◎

政府は、地元住民の意思にかかわらず日米合意を優先させるとの見解を発表したが、地元住民の苦悩をまったく無視し、民主主義を根幹から否定するものとして、私たち住民は絶対にこれを許すわけにはいかない。今後、政府は住民投票の結果を矮小化し、閉塞状況に追いやるようにしてくると思う。住民投票を機にその後の粘り強い運動で辺野古沖の海上基地建設

案を国に諦めさせた沖縄の人たち、騒音のたらい回しは断固反対と言って下さる厚木の人たち、全国各地の人たちと連帯しながら私たちも粘り強く闘っていきたいと思う。

近く「住民投票の結果を実現させる会」を発足させる予定だ。まさに民主主義、主権在民の実が問われている。これからが正念場、今後とも、皆さまのご支援とご協力をどうかよろしくお願いします。(おおかわ・きよし、住民投票を成功させる会・共同代表、日本基督教団牧師)

〔平良修「辺野古」17ページ下段より〕

場ではない、反戦運動の場でもない、基地建設阻止行動の場なのだと自覚し、野獣的暴力によってではなく、非暴力行動によって人間共生を創出する場なのだとなつた。個々人の群れによる行動だった。真なるものに目覚めた個々人の団結に日米両政府は敗退させられた。しなやかにしぶといこの平和の群れは、軍事力信仰の国家権力について打ち勝つことができただのである。

しかし、最初の予定地を断念させられた日米両政府は、場所を変えて、建設の強行をしようと目論んでいる。非暴力直接徹底抵抗は次の勝利を求めて、なお続くことになる。

(たいら・おさむ、沖縄、牧師)